

氏 名	おお え てつ お男 大 江 徹 男
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	論 経 博 第 292 号
学位授与の日付	平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	アメリカ食肉産業と新世代農協

論文調査委員 (主 査) 教 授 中 野 一 新 教 授 岡 田 知 弘 助教授 若 林 靖 永

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、米国豚肉産業の近年における構造変化と、伸長著しい「新世代農協」の可能性を探求した労作である。

本論文は2部10章からなるが、まず序章では、アグリビジネスの「垂直的調整」や米国の農協に関する先行研究が丹念にサーベイされ、それを踏まえて本論文の2つの課題が設定される。ひとつは、米国中西部農業の基幹的存在形態であった有畜複合経営が急激に後退し、パッカー（食肉加工処理企業）主導の垂直的調整が進展していく過程で、家畜飼養農家の経営の独立性が蝕まれてきた現実を浮彫りにする課題である。いまひとつは、パッカー主導の垂直的調整に対抗する家畜飼養農家サイドのオルタナティブとして、近年台頭してきた「新世代農協」の最新の動向と、同農協の経済的役割に関する事実を照らした分析である。

以上の課題設定を踏まえて、実証作業を試みる本論に移る。第Ⅰ部（第1章～第4章）はパッカー主導の垂直的調整の実態分析がテーマである、まず第1章では、米国の伝統的な養豚地帯である中西部のアイオワ州と新興養豚地帯である南部のノースカロライナ州とを比較対照しながら、先端飼養技術の導入に伴う生産構造の一大変化の実態を概観する。

第2章では寡占化への途を突き進んでいる食肉パッカーの事業戦略にメスが入られる。具体的には、生産契約や販売契約を梃子にした生産部門と加工処理部門との提携＝「垂直的調整」が強化されていく姿が活写される。

第3章ではアイオワ州に焦点を当てて、豚肉生産の構造実態の変化が伝統的な有畜複合経営に及ぼす影響を、つぶさに分析している。家畜飼養と飼料穀物生産の双方に取り組んできた有畜複合経営は、農業生産特化による効率化の追求にひた走る時代の風潮に翻弄されて苦境に立たされ、結局は穀物と畜産のリンケージが途絶されつつある現実が克明に描かれる。これまでの複合経営は穀物価格と食肉価格との変動に経営内で対処する一種のリスク・ヘッジ機能を有していたが、さきのリンケージの断絶によって、この機能が失われつつあるのは重大である。

第4章では、垂直的調整の評価基準となる契約生産や契約販売の仕組みや問題点が解明される。現地調査のおりに入手した現在使用中の契約書を素材にして、生産者とパッカーとの間で交わされる契約の内容が吟味され、家畜飼養農家にとっての問題点が整理される。

後半の第Ⅱ部（第5章～第8章）では新世代農協が俎上にあげられる。まず第5章では、米国の新世代農協の全般的な動向を概観し、同農協が北西部を中心に拡大してきた背景や、従来の米国農協との異同について考察される。

第6章では、新世代農協 U. S. Premium Beef を事例分析の対象に取り上げ、後述する豚肉産業における新世代農協との対比のために、牛肉産業における同農協の事業展開状況が検討される。Premium Beef は大手パッカーに対抗するため、大農協と提携して牛肉品質の差別化戦略を展開し、一定の成果をあげている事実が確認される。

第7章では、米国最大の農協のひとつファームランドの養豚部門を取り上げ、豚肉産業における農協の今日的役割について詳細に分析される。養豚部門においては肉牛部門におけるような農協の華々しい成功例は、いまだ見いだされていないが、新世代農協の手法を採り入れた大農協の新たな試みを、生き生きと描出しているのは興味深い。

第8章では、新世代農協の地域レベルでの展開状況が論じられる。ミネソタ州のあるコミュニティにおける事例分析をと

おして、様々なネットワークの展開をベースに、新世代農協が連鎖的に設立されていく経緯がつぶさに紹介されている。地域発展の主体形成という観点から見逃せない重要なケース・スタディーである。

最後の終章では、第Ⅰ部と第Ⅱ部の実証作業を踏まえて、本論文の結論要旨と今後に残された研究課題を提示し、結びにかえている。

論文審査の結果の要旨

近年、米国の豚肉産業は工場生産タイプの先端技術の導入が契機となって、大々的な構造変容を遂げ、養豚版プロイラー産業化ともいべき事態を現出している。本論文は豚肉産業のこうした構造変化の実態と、それに対応する形で設立が進んでいる新しいタイプの農協＝「新世代農協」の可能性について考察したものである。

幾多の先行研究を乗り越える本論文の第1の学術的意義は、米国の養豚産業の急激な構造変化を、豊富な統計資料と丹念な現地調査を踏まえて、包括的に描出した点である。なかでも圧巻なのは、現地調査のおりに入手した実際の契約文書を素材に、パッカー主導の垂直的調整の内容を子細に検討した部分である。

第2に、生産部門や加工処理部門の分析と、畜産公害やパッカーに対する法的規制の検討をつうじて、豚肉産業もまた「対立から調整へ」向かうとする取引費用論の見地に立つ論者の主張を、事実に即して綿密に批判しており、この部分が本論文のなかでもひときわ優れている。著者は、①調整主体であるパッカーの経営戦略の比較分析と、②生産者側からみた契約関係の構造分析という2つの分析視角を提起することで、パッカー主導の垂直的調整の実態に肉薄している。

第3に、パッカー主導の垂直的調整に対抗する生産農家サイドのオルタナティブとして、新世代農協に着目した点も、おおいに評価できよう。1980年代中葉の戦後最大の米国農業不況期に、全米各地の農協が相次いで倒産したり、穀物メジャーに代表される大手アグリビジネスの系列企業の地位に転落していったが、90年代になると新たな形態と特徴を有する一群の農協が台頭してくる。いわゆる「新世代農協」である。家畜飼養農家の経営の独立性を保持することを目標にして登場してきた新世代農協にいち早く注目し、同農協の最新動向を綿密にフォローした点は刮目に価する。とくに、ミネソタ州でのケース・スタディーを踏まえて、新世代農協が点から面へと連鎖的に波及する可能性が示唆されており、地域農業の主体形成という観点からも興味深い。

このように本論文は独自の視点から数々の新知見を提示しており、十分オリジナリティを誇りうるが、以下のような課題を今後に残している。

第1に、取引費用論を批判するさいの拠り所として、著者は、市場取引が近年になって後退し、市場外取引が急テンポで拡大してきている事実を重視しているが、米国の養豚部門において、なぜこうした事態を惹起することになったのか、この点についての掘り下げた分析がいささか不十分である。

第2に、生産者サイドのオルタナティブとして、著者は新世代農協に大きな期待を寄せているが、家畜飼養農家にとって、なぜ協同組合形態が有効なのか。この点についての考察も十分ではない。協同組合形態だけでなく、家畜飼養農家主導の会社形態をも含めた様々な形態がありうるのではないか。種々の作目や全米を視野に入れたさらなる研究の深化が望まれる。

第3に、パッカーによる支配が貫徹している米国内において、家畜飼養農家が経営の自立性を確保する途として、著者は新世代農協の成長を重視しているが、このタイプの農協が大きく発展できるのは、大手パッカーにとってはあまり魅力のないニッチ市場に限られるのではないか、という疑問も残る。台頭してまだ日の浅い新世代農協の推移を、いま少し見守りながら、最終的判定を下す必要があるだろう。

以上のように、いくつかの研究課題を今後に残しているものの、本論文はその分析視角と実証研究において、先行研究の水準を超える独創性を十分具備していると評価できる。

よって本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、平成14年12月19日論文内容とそれに関連した試問を行った結果合格と認めた。